

発行: 日本写真芸術学会会報編集委員会

The Japan Society for Arts and History of Photography.

1. 年次大会 案内

令和5年度日本写真芸術学会年次大会ご案内

会員の皆様には益々ご清栄にてお過ごしのこととお慶び申し上げます。

このたび以下の通り、令和5年度年次大会のご案内をいたします。総会は継続して文書総会とさせて頂きましたが、基調講演・研究発表会は4年ぶりに対面形式（オンライン併用）で開催いたします。

研究発表に先立つ基調講演は、これまでニューヨークを拠点として世界の「聖地」を撮り続けている国際的に著名な写真家・井津建郎氏にお願いしています。基調講演に続いては、8件の会員の多彩な研究発表を予定しています。また研究発表会に続き、こちらも4年ぶりの学会賞授与式、そして懇親会も実施いたします。多数の会員の皆様のご参加をお願い申し上げます。

ご参加頂く際には、学会HPの申込フォーム、EメールまたはFAXにて、懇親会へのご出席を含め、事前登録をお願いいたします。

学会HP：<https://www.jsahp.org/>

Email：jsahp.info@gmail.com

FAX：03-6279-8291

年次大会後の懇親会参加費 500円

申込締め切り：令和5年7月5日（水）

申し込まれた方には事務局から確認のお知らせをいたします。



大会案内ページ
QRコード

令和5年度年次大会 基調講演・研究発表会プログラム

下記の通り令和5年度年次大会の基調講演・研究発表会を開催いたします。

開催期日：令和5年7月8日（土）

研究発表会 13:00-18:10

懇親会 18:30-

会場：東京工芸大学中野キャンパス 5号館（芸術情報館）1階メインホール
東京都中野区本町 2-9-5

開会挨拶 13:00-13:05

基調講演 13:10-14:00

「Journey Without Map・地図の無い旅」

井津建郎（写真家 いづ けんろう）

研究発表①（調査口述） 14:05 - 14:25

「汪曉青（Hsiao Ching Wang）の作品「The Mother as a creator 母親如同創造者」の考察」

馬場さおり（台南應用科技大学美術学科）

（オンライン発表）

－ 休憩 －

研究発表②（調査口述） 14:40 - 15:00

「建築家・隈研吾氏設計「角川武蔵野ミュージアム」において撮影された写真を比較し、建築写真とは何かを考察する」

八木元春（日本大学芸術学部写真学科）

研究発表③（調査口述） 15:05-15:35

「関東大震災から復興中の東京写真 新発見！」

石黒敬章（石黒コレクション保存会）

研究発表④（調査口述） 15:40 - 16:00

「世界初の実用的カラー写真オートクロームの日本における動向」

仲川真由（日本大学大学院芸術学研究科映像芸術専攻修了）

－ 休憩 －

研究発表⑤（論文口述） 16:15-16:45

「失われた技法『写真油絵』の復元的研究 ―「紙盤ニ製スル法」の再現」

○谷 昭佳（東京大学史料編纂所）

宇都宮正紀（奈良大学・（株）修美）

研究発表⑥（論文口述） 16:50-17:10

「木村伊兵衛の《ポラロイド写真》について——近代写真批判の視座を踏まえて」

篠田 優（明治大学理工学部・明治大学大学院理工学研究科建築・都市学専攻総合芸術系博士後期課程）

研究発表⑦（調査 / ポスター） 17:15-17:20

「川田喜久治の作品『地図』をめぐって日米で語られる広島」

ヒントン実結枝（慶應義塾大学大学院文学研究科）

研究発表⑧（作品口述） 17:25-17:35

「運動の痕跡の記録―「視覚性」を保留し「視覚」の経験を呼び起す試み」

神林 優（宝塚大学東京メディア芸術学部）

学会賞授与式 17:45-18:00

閉会挨拶 18:00-18:10

懇親会 18:30-（会費 500 円）

1949 年大阪生まれ。日本大学芸術学部写真科に在学中の 1971 年、21 歳の時にニューヨークを訪れ、そのまま滞在し移住に至る。1974 年 Kenro Izu Studio を設立。以後 50 年にわたり、ニューヨークを拠点に活動。2021 年、石川県金沢市へ永住帰国し金沢を拠点に活動を再開する。

1979 年最初のエジプトでの撮影を通じて「聖地」に興味を持ち、以降ライフワークとして世界 30 か国以上の聖地の撮影を続けている。1983 年から 14x20 インチのフィルムを使った密着プラチナ・プリント技法を開始し、「聖地」や「Still Life」の撮影を続け、現在に至る。また同年からアメリカを中心にフランス、ドイツ、スイス、イタリアなどヨーロッパ、またアジアではバンコク、台北のギャラリー、美術館などで個展を多数開催。NY メトロポリタン美術館、ボストン美術館、サンフランシスコ美術館や清里フォトアートミュージアム、東京都写真美術館などに作品が収蔵されている。

写真活動以外に認定非営利団体・フレンズ・ウイズアウト・ア・ボーダーをニューヨークと東京に設立(1996)、1999 年にカンボジアにアンコール小児病院、2015 年にラオスにラオ・フレンズ小児病院を設立し、創設者・理事としてそれらの非営利小児病院運営に携わっている。

著書

Sacred Places(Arena Edition), Kenro Izu Still life(Arena Edition), 30 Year Retrospective(Nazraeli Press), Eternal Light (Steidle), Seduction (Damiani), Fuzhou/Forgotten Land(Nazraeli Press), 50 year journey “無常”(Varitas Edition) 等 20 冊。

受賞

National Endowment for Art (USA), New York Foundation for Arts, Guggenheim Foundation Fellow, Lou Stouman Award, Lucie Visionary Award, World of Children Award 等他。



井津 建郎氏

2. 会長挨拶

ポストコロナの学会活動について

日本写真芸術学会会長 高橋則英

学会会員の皆様にはお変わりなくお過ごしのことと拝察いたします。日頃より学会の活動にご理解ご協力を頂き感謝申し上げます。

2020年明けから始まったコロナ禍も丸3年を過ぎ、その脅威は依然として去ったわけではありませんが、社会的には感染症の分類も変更となり、これまでの多くの制限も解除され、ようやく以前の日常に戻りつつあることを感じるようになりました。

ご存知のように感染症流行が始まるとともに学会活動は大きな影響を受けてきました。年次大会も2020年は総会、研究発表会とも文書送付で行い、2021年から研究発表会はオンラインの形態で実施してきたところです。

本年度の年次大会は、総会は引き続き文書総会といたしましたが、研究発表会は4年ぶりに対面形式で行います。本ニュースに掲載のプログラムのよう、写真家の井津建郎氏の基調講演に続き、8件の研究発表が予定されております。会員の皆様方には奮ってご参加頂きますようご案内を申し上げます。またオンラインも併用する予定ですので、遠方からのご参加も可能です。

コロナ禍が始まって以来、授業や会議などを始めとして様々な場面でオンラインシステムの活用が進みました。この間、理事会もオンラインで行ってきました。対面で直接話すことができないとはいえ、これまで理事会に出席することが容易でなかった関西や九州の理事の方々とも、様々な意見を交換できるようになったことは喜ばしいことでした。多くの困難な状況があったコロナ禍でしたが、オンラインの普及などはコロナ禍のポジティブな影響であったと考えることができるでしょう。オンラインの活用は継続していきたいと考えております。

またコロナ禍と直接関係することではありませんが、学会の運営体制としては昨年度から事務局業務を外部委託する新たな試みを行い1年が過ぎました。近年の会員数の減少を主たる要因とする学会の財政状況悪化を鑑み、一昨年度に理事会にて検討を重ねてきましたが、運営費の約3割を占めてきた人件費を削減すべく、事務局業務を外部委託することとしたものです。本学会にとっては初めての試みとして手探りで運営を行ってまいりましたが、今後の有意義な学会活動の継続には必要な取り組みであったと考えております。

また事務局業務の委託に伴って、理事会が活発に活動することが会の活性化に必須のことであると考え、新たな委員会の活動も進めています。総務（庶務）、財務の担当や、これまで学会誌を担当してきた編集委員会に加え、事業（企画）、広報、会勢拡大などの委員会を設定し、理事会メンバーがいずれかの委員会で活動する方向で運営を進めています。

また研究会活動として2022年度は3年ぶりに写真プリント研究会や写真史研究会を開催することができました。これら研究会も今後は各研究分野の分科会として、より活発な活動を進めてもよいのではないかと考えております。さらには学会活性化のため、新たな研究会活動の必要性もあるでしょう。そのような事業に事務局業務の外部委託によって余裕が生じた予算を充当していくことも検討していきたいと考えます。

会員の皆様には、これらについて一層のご理解をお願いするとともに、学会の活性化を目指すため、さらなるご協力を頂ければ幸いです。末筆ながら、会員の皆様にはご健康に留意してお過ごし頂くとともに、今後とも本学会をよろしくお引き立てのほどお願い申し上げます。

3. 関西支部 第8回 研究会

日本写真芸術学会 関西支部第8回写真研究会 報告

1970年代以降の関西の写真の動向を考え、アーカイブスの方法論を探る
—「地平とその時代」—

日 時：2023年1月21日（土曜日）午後2時～午後4時

登壇者：百々俊二氏（写真家） 司会：村中 修理事

会 場：京都芸術大学大阪サテライトキャンパス 503 教室

方 法：対面開催とオンライン配信を併用

参加者：対面 15 名、オンライン 21 名（ZOOM ログデータによる延べ人数）

最初にオンラインにて高橋会長よりご挨拶をいただき、村中理事より研究会の主旨などをお話した後、百々俊二氏に「地平とその時代」と題して、百々氏が用意された 400 枚以上の写真資料を見せていただきながらの講演となりました。

「地平」は 1972 年に当時東京写真専門学校九州校（現九州ビジュアルアーツ）の教員であった百々俊二氏と黒沼康一氏を中心に創刊され、その後活動の拠点を大阪写真専門学校（現ビジュアルアーツ専門学校・大阪）に移して 1977 年の 10 号まで刊行された写真同人誌です。また 40 年以上の期間を空けて、2018 年に 11 号を、2019 年に 12 号を発刊しました。まず発刊当時の時代背景として百々氏が撮影された 70 年安保闘争や、米軍基地等の作品、また氏が大きな影響を受けたと言う写真家森山大道氏の「日本劇場写真帳」「PROVOKE」などを見せていただきながら「地平」発刊に至る経緯や思いをお話いただきました。その後地平 1 号から 12 号までの掲載写真を、素粒子の 35mm スナップ、から大判カメラの精密描写という表現方法、対象の変遷を様々なエピソードと共にらせていただき、最後に質疑応答を行って閉会しました。

創刊号から 12 号までの「地平」に共通して掲げられた黒沼康一氏の「自己表現に終始する回路を断て。見たいのはきみの写真ではなく、君の写真が開示する世界なのです。（一部抜粋）」という言葉が、時代や表現方法の変遷を越えて通底していることが非常に印象的でした。また最後に「メンバーの変遷がありつつも 10 号まで続けることができた秘訣」についての質問に対し、メンバーの出入りはあったものの、常に黒沼氏、百々氏を中心とする数名のコアメンバーがいたことをあげられ、復刊した 11 号、12 号に参加したメンバーが同じようにコアとなって続けていって欲しいと今後への期待を話されました。

コロナ感染も収まらないなか、久々の対面研究会でどれだけの方に来場していただけるか心配でしたが、田中副会長、大阪中之島美術館館長菅谷富夫氏を含め 15 名の方に来場いただけたことを大変うれしく思いました。

報告：村中 修



会場風景



百々 俊二氏



村中 修 理事

「地平」創刊号～12号

撮影：赤木正和

4. 写真プリント 研究会 報 告

日本写真芸術学会 第4回写真プリント研究会

「黒白銀塩写真に魅せられて」開催報告

日 時：令和5年2月25日（土） 14:00～16:00

会 場：JCIIビル6階 会議室（参加費 無料）

内 容：講演とディスカッション

講 師：鈴木孝史（国際ファッション専門職大学教授）

参加人数：33名

日本写真芸術学会では、写真表現において、最も基本的かつ写真作品の根源ともいえるべき“プリント”を大切にしていきたいと考えています。現在、写真は身近なコミュニケーションのツールであり、アートの重要な表現手段の一つとなっていますが、デジタル技術の急速な発達に伴い、発表の場や方法も多様化し、写真表現そのものも変化してきました。このような時代の流れの中で、写真表現とプリントの今後について会員の皆様と共に考えるため、平成28年度に「写真プリントセミナー」を開催して好評を博しました。それを受けて平成29年度から、写真プリント研究会を開催しております。この数年の間 COVID-19 の感染拡大等を受けて研究会を休止しておりましたが、この度、第4回プリント研究会を開催する運びとなりました。

現在、写真といえばデジタルと考えるのが当たり前の時代ですが、鈴木教授の写真生活はほとんどがアナログでした。その学生時代に各感材メーカーから発売されている現像処方の他に、世界では数多くの処方が発表されていたことを知ったとのこと。特に黒白銀塩写真のプロセスはカラー写真のそれとは違って数多くの処理方法が発表されていたので、その結果に対する興味から鈴木教授の現像処理行脚が始まりました。講演会は、副会長の吉田成（写真プリント研究会担当）の開会の挨拶に始まり、約2時間に渡る鈴木教授の講演、引き続いて教授自身による美しいプリントを間近に見ながらのディスカッションと続きました。大勢の方々が最後まで残って、熱心にプリントを鑑賞し、ディスカッションしました。鈴木教授のフィルム現像やプリントの研究に対する長年の情熱を感じることができたと同時に、アットホームな良い雰囲気の研究会でした。

なお、今回の研究会は、本学会初の試みとして、講演を動画で記録し、アーカイブ配信を致しました。



鈴木 孝史氏



日本写真芸術学会 第2回写真史研究会

「幕末日本を記録した幻の写真家チャールズ・ウィード」 開催報告

日 時：令和5年3月8日（水） 14:00～17:00

会 場：横浜開港資料館 講堂および展示室（参加費 500 円）

内 容：レクチャーとディスカッション 14:00～15:30 展覧会見学 15:30～17:00

ゲスト：セバスティアン・ドブソン氏（古写真研究家・本学会海外会員）

レクチャー：「日本におけるチャールズ・ウィードの足跡」

コメンテーター：吉崎雅規氏（横浜開港資料館学芸員）、高橋則英会長（写真史研究会担当）

参加者：30 名（実行委員・会員外含）

日本写真芸術学会の主要な学問的研究分野である写真史については、これまで会員の多様な研究成果が年次大会研究発表会や学会誌において発表されてきました。学会ではさらにその研究の活性化と深化を目指して研究会活動を進めるべく、2019（令和元）年8月に第1回写真研究会を開催しました。その後、新型コロナウイルスの流行により研究会活動が停止していましたが、この度、横浜開港資料館における特別展「幻の写真家 チャールズ・ウィード 知られざる幕末日本の風景」に合わせ、第2回写真史研究会を開催することになったものです。

ウィード（Charles L. Weed 1824-1903）は、1867（慶応3）年から1868（慶応4）年にかけて来日したアメリカの写真家で、マンモスプレートと呼ばれる巨大なサイズ（約45×55cm）の湿板ガラスネガの使い手でした。彼は幕末の来日で日本各地の景観を撮影しましたが、現存している作品も少なく、経歴も不明な点が多かったため、これまで「幻の写真家」ともいわれていました。然るに近年、ウィードが撮影したとみられる30点以上の日本各地（長崎・江戸・横浜・鎌倉）の写真が発見され、これらに横浜開港資料館及び日本大学芸術学部が所蔵する作品等を加え、ウィードとしては初めての展覧会が企画されることになりました。今回の研究会では、展覧会図録に論考を寄稿しているセバスティアン・ドブソン氏にレクチャーをお願いし、展覧会の見学と合わせた内容構成としました。

当日は、最初に高橋会長から開会挨拶と、学会および写真史研究会についての説明を行った後、今回の展覧会を担当した学芸員・吉崎氏から展覧会開催の経緯についての説明をして頂きました。その後、高橋会長がゲストであるドブソン氏の略歴や業績を紹介した後、レクチャーに移りました。

ドブソン氏は、ウィードの経歴を紹介するとともに、その作品としては欧米ではヨセミテの風景写真などが知られているのみで、それも他の写真家に比べて認知度が低いこと、さらに幕末に来日した際の写真はほとんど認知されていないことを示しました。その上で、日本に最初にマンモスプレートカメラを持ち込んだのはウィードが最初であること、そして短期間の来日期間の足跡を、日本に滞在していたベアトやパーカーといった他の写真家との関連も含めて解説し、今回まとまった形でウィード作品の展覧会が開催される意義について強調しました。

ドブソン氏のレクチャーに続いて吉崎氏から、ウィードが来日したのは外国人を取り巻く日本の社会情勢が安定していた時期で、その前後と比較すると奇跡的ともいえるタイミングであり、そこで撮影された記録の価値について補足解説がありました。また高橋会長から、ウィードが使った驚異的な湿板のマンモスプレートの技術について補足説明を行いました。そして会場からの質疑応答を行った後、参加者は少人数に分かれて展示室でウィード作品や関連資料について熱心に閲覧を行いました。

今回の研究会は東京以外で平日の午後という初めての試みでしたが、久しぶりの研究会の開催であり、また大変興味深い展覧会に合わせた企画であったため、九州や関西など遠方の会員にも参加して頂き、大変有意義な研究会となりました。



セバスティアン・ドブソン氏

6. 理事会 報告

令和4年度第3回理事会 R04.07.11

(オンライン会議)

報告連絡事項

1. 第2回理事会議事録確認
2. 5・6月収支報告、年次大会収支報告
3. 令和4年度年次大会（総会・研究発表会）報告
4. 学会ニュース No.81 発行について
5. 学会 HP 用役員名簿

審議事項

1. 会員入退会手続き
2. 学会誌＜創作編＞発行について

令和4年度第4回理事会 R04.09.27

(オンライン会議)

報告連絡事項

1. 第3回理事会議事録確認
2. 7・8月収支報告
3. 学会ニュース No.81 発行報告
4. 日本写真学会協賛事業について

審議事項

1. 会員入退会手続き
2. 学会誌＜創作編＞審査方法について
3. 理事の役割分担について

令和4年度第5回理事会 R04.10.24

(オンライン会議)

報告連絡事項

1. 第4回理事会議事録確認
2. 9月収支報告
3. 学会誌＜創作編＞審査結果報告

審議事項

1. 会員入退会手続き
2. 令和5年度役員選挙について
3. 理事の役割分担について
4. 関西支部第8回研究会について

令和4年度第6回理事会 R04.12.05

(オンライン会議)

報告連絡事項

1. 第5回理事会議事録確認
2. 10・11月収支報告
3. 学会誌＜創作編＞進行状況報告
4. 広報委員会の活動報告

審議事項

1. 会員入退会手続き
2. 令和5年度役員選挙について
3. 写真プリント研究会、写真史研究会、関西支部研究会
4. 理事の役割分担について
5. 会費未納者の対応について

令和4年度第7回理事会 R05.01.30

(オンライン会議)

報告連絡事項

1. 第6回理事会議事録確認
2. 12・1月収支報告、会費未納者報告
3. 学会誌＜創作編＞発行報告
4. 関西支部 第8回写真研究会報告
5. 事業委員会報告

審議事項

1. 会員入退会手続き
2. 令和5年度役員選挙について
3. 令和5年度年次大会について
4. プリント研究会・写真史研究会について
5. 協力名義使用について（PHOTONEXT 2023・色の国際シンポジウム）

令和4年度第8回理事会 R05.03.31

(オンライン会議)

報告連絡事項

1. 第7回理事会議事録確認
2. 令和4年度収支報告、1・2・3月収支報告
3. 令和5年度役員選挙結果報告
4. 写真プリント研究会・写真史研究会開催報告
5. 事業委員会報告

審議事項

1. 会員入退会手続き
2. 学会誌＜論文編＞について
3. 令和5年度年次大会について
4. 協力名義使用について（相模原市総合写真祭フォトシティさがみはら 2023・田沼武能を追悼する会）
5. 講師謝礼について
6. 理事・評議員・監事役員合同会議について

令和5年度第1回理事会 R05.04.25

(オンライン会議)

報告連絡事項

1. 令和4年度第8回理事会議事録確認
2. 令和4年度決算報告、令和5年度4月収支報告
3. 第4回写真プリント研究会報告

審議事項

1. 令和5年度前期スケジュール案について
2. 会員入退会手続き
3. 海外会員会費納入方法について
4. 令和5年度年次大会について（総会議案・学会賞・研究発表会）

7. 入会・ 退会者 一覧

令和5年4月25日理事会承認分まで（五十音順）

〔学生会員より正会員への移行〕

中村一洋

〔入会者・正会員〕

宇都宮正紀、呉在雄、大野深美、大和田良、神林優、
金旻貞、ギャラリー・マクラウド、黒岩正和、鈴木直史、
高田有輝、高村達、刀谷公子、中澤賢、
ヒントンミュキ、安田暁

〔退会者・正会員〕

上野恭嗣（逝去）、小口貞秀、小椋力、片岡襄、
勝又公仁彦、川上清、久野鎮、児島祥浩（逝去）、
近藤大（逝去）、鈴木實、瀬川陣市、高野経将、
武信瑞絵（逝去）、奈須田一志、西貝雅人、廣瀬常雄、
増田種臣（逝去）、水本一義、村上由鶴、山田哲男

〔入会者・学生会員〕

飯塚純、川上洸、張雅瓊、安田友重

8. 会員の 皆様に お願い

会員の皆さまにお願い

現在、日本写真芸術学会では、一層の学会活動の活性化と会勢拡大を図っております。
そこで、改めまして会員の皆さまに次のようなお願いをしたいと思います。

- ① 学会誌（論文編・創作編）に積極的にご投稿下さい。
- ② 本学会主催の年次大会・研究会・セミナー等に積極的にご出席下さい。
（研究会等のアーカイブ配信を開始しましたのでご視聴下さい。）
- ③ 展覧会開催や関係図書の出版に際して、本学会の会員であることをプロフィール等にお示し下さい。
- ④ 展覧会開催や関係図書の出版に先立って、学会事務局に情報をお寄せ下さい。
（学会ホームページ等を通じて、会員の皆さまの活動を広報します。）
- ⑤ 本学会の理念や趣旨に賛同される方をご存知でしたら、ご紹介ください。

学会誌・論文投稿募集のご案内

(投稿料、掲載料とも無料)

学会誌は学会の重要な研究発表の場です。会員の皆様には益々活発な研究成果の発表・投稿をお待ち致しております。詳細につきましては学会誌巻末又は学会 HP 内の「投稿規定」をご覧ください。

学会誌〈論文編〉令和 5 年度 第 32 巻・第 2 号については、投稿料、掲載料とも無料といたします。(通常通り査読は行います。)

—— 記 ——

投稿申し込み期日：令和 5 年 9 月 30 日

*学会 HP の論文投稿申込フォームからお申込み頂くか、又は所定の申込書を添付して、投稿論文を期日までに学会事務連絡先までお送り下さい。

*原則的に投稿論文は CD 等のデータ入稿をお願い致します。更にプリントアウトした論文(英文タイトル、アブストラクト、論文に必要な図、表、写真原稿)を一式添付して下さい。

*10 月中旬に査読審査の上、ご連絡の予定です。

発行予定日：令和 5 年 12 月中旬

投稿論文等の数が極端に少なかった場合、またその内容や査読審査の結果によりやむを得ず発行を休止することもありますので、ご了承下さい。

キリトリセン

論文投稿申込書

年 月 日

日本写真芸術学会誌				号へ論文の投稿を申し込みます。	
氏名				会員番号	
連絡先	〒	電 話			
		メー ル			
題名				原 稿	原稿用紙 約 字
				形 態	
論文概要					
事務局欄	年 月 日 受付		整理番号		

コピーをとってご利用下さい。